「問い」についての断想　１

～解く力よりも見つける力を～

フランス文学研究家の千野帽子氏は、「人はなぜ物語を求めるのか」（ちくまプリマー新書）という著書の中で、「感情のホメオスタシス」ということについて、次のように述べている。

ストーリー的な解釈によって非常時を切り抜け、失われた平常を取り戻したいという感情。これを僕は、感情のホメオスタシスと考えています。

広辞苑によると、ホメオスタシスとは、恒常性を表す生理学用語であり、もともとは、「生物体の体内諸器官が、外部環境や主体的条件の変化に応じて、統一的・合目的的に体内環境をある一定範囲に保っている状態・および機能。」を指す言葉であったが、後に、精神内部のバランスについても言うようになったとのことである。

千野氏は、別の頁で、私たちが感情のどこかで「問題ー解決」のストーリー図式を期待しているとも言っている。非常事態に陥った時、私たちは、失われた平常を取り戻そうとして、問題と解決の間に何らかのストーリーを作らずにはおれないらしいのである。

私には、この言葉で思い出す出来事がある。

６年生の子どもたちを修学旅行に連れて行った宿舎での出来事。食事が終わり就寝時刻が迫ってきた頃、廊下で女の子たち数人がもめていた。細かいところは忘れてしまったが、仲裁に入った担任の先生が、もめごとの起こったわけを彼女たちに尋ねているところに通りかかったのである。しばらく双方の話を聞いていて気付いたことがあった。先生の「なぜもめることになったのか？」という問いに対して、子どもたちは、お互いに相手の非を主張し合い、さらにその主張に異を唱え合っているのである。担任の思惑とは裏腹に言い合いはさらに広がり、いつまでたっても収まりそうもなかった。

この時、私は、担任の「なぜ・・・？」という問いかけに対して、女の子たちは、無意識のうちに自分たちに都合のよいストーリーをつくろうとしているのではないかと思えた。もめごとという非常事態は、お互いに不快なものであり、少しでも早くそこから抜け出したい。その時、彼女たちの心をとらえていたのは、この不快な感情であっただろう。そこから抜け出し、平穏な状態に戻るための手っ取り早い解決方法を双方が求めていたと考えられる。それは、問題の原因や理由を見つけることである。（担任教師もそれが見つかれば、仲直りさせられると思っていたのだろう。）しかし、彼女たちの言い分に耳を傾けていると、双方が相手の非を主張するばかりで、いっこうに問題の原因・理由は共有できずじまいであった。

「なぜ？」という「問題」は、当事者同士に、その理由・原因という「解決」に必要な答えを求めるが、同時にそれは、双方に千野氏の言う「ストーリー図式」を呼び起こさざるを得ない「問い」でもあったのだろう。ところが、双方が作る解決のためのストーリーが、どうしても自分たちに都合のよいものになっており、共有できず納得しがたいものであったのだ。

当事者に対して非常事態の理由や原因を外から求める「なぜ、こうなったか？」という問いは、「非常」の中の当事者を真の理由・原因から遠ざけてしまうものではないだろうか。

当事者を非常事態の理由・原因の潜む「事態」に立ち戻らせ、それを探らせるには、「なにがあったのか？」と、事実としての「事態」を問うところから始めるしかない。しかも、あったことを双方が確認し合いながら、その「事態」を探し出すことそのものが、とても難しいことなのである。「事態」に立ち返って問題の理由や原因を見つけても、場合によっては、問題の解決にはならないことだってあるのかもしれない。

今、教育の世界で、時代を生きぬいていく子どもたちに求められているのは、「問題解決能力」なのであろうが、「解決する」とはいったいどうすることなのか。私は、そのことにどことなくうさんくさいものを感じる。千野氏の言われる通り、人間の「問題ー解決」のプロセスには、必ず当事者にとっての「失われた日常を取り戻したい」感情から生じる「ストーリー的解釈」が入り込むのであるから、本人にとって都合のよい解決を避けることができないのである。解決したかに見える、あるいは平穏に見える日常の中から、むしろ問題を見つける力こそ、よりよい「日常」のためには必要なものではないか。

創造の基盤は、その基盤の安定の中にいても、その安定のありようそのものを疑うことのできる想像力である。答えは問処にあり。よい答えはよい問いから生まれるという禅の言葉の意味するところを、あらめてかみしめてみたいと思う。

（２０１８・１１・１６　川端建治）